

●五〇年に及ぶ植民地経験がもたらしたものは何か。戦後六〇年の歲月の中で様々に語られてきた「他者像としての日本」とその「支配」。コロナアルの言説を読み解く。

戦後台湾における〈日本〉

——植民地経験の連続・変貌・利用

五十嵐真子・三尾裕子編

本書は二〇〇五年三月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて行われた、国際ワークショップ「戦後台湾における「日本」——植民地経験の連続・変貌・利用」での口頭発表、およびディスカッションを元にしてている。このワークショップでは、人類学と歴史学の立場から台湾研究に携わってきた日本と台湾の研究者が、学問領域や研究対象による境界を越えて台湾における植民地経験についての議論を行った。ここでいう「戦後」とは、第二次世界大戦後、つまり日本の敗戦により台湾が日本から独立した後の時期をさしている。台湾ではこれまで「光復」という用語が用いられることが一般的であったが、近年は「戦後」と表現されることが多くなってきたため本書においても「戦後」という用語を用いることとする。ワークショップにおいて行われた報告とその討議の内容については後で詳述するとして、ここではまず本書の主題である台湾における植民地経験と戦後の日本認識について、それらをなぜ今、どのような立場で取り上げるのかについて述べたい。……

このように複雑な局面をもつ植民地経験を、我々日本人は一体どのように捉えたらよいのだろうか。

植民地経験に関する人類学的研究は、近年いくつかの新しい成果が出されるようになってきている。植民地状況に置かれた人々の営為を、服従した、あるいは抵抗したという従来の単純な二項対立的な構図では捉えきれない多様なものであるとし、人々はそんなに単純に支配されたのでもなければ、あからさまに抵抗したのでもなく、ときにはしたたかに自らを有利とする社会・文化資源としてそれを利用するということさえあったのではないか、とする分析が具体的な事例をもとになされている。……本書はこの試みに連なるものであり、また人類学のみではなく歴史学からの視点や他の日本統治経験を持つ地域の研究者による指摘を含むことによって、議論をより発展したものとしている。

●目次

- はじめに 〈五十嵐真子〉
日本統治時代と国民党統治時代に跨って 〈蔡錦堂（水口拓寿訳）〉
生きた台湾人の日本観 〈宮崎聖子〉
元台湾人特別志願兵における「植民地経験」 〈宮崎聖子〉
二つの「日本」——客家民系を中心とする台湾人の「日本」意識 〈堀江俊二〉
植民地台湾における高等女学校生の「日本」——植民地の生活文化に関する一試論 〈植野弘子〉
台湾先住民アミの出稼ぎにみる植民地経験——遠洋漁業と日本語 〈西村一之〉
自画像形成の道具としての「日本語」 〈上水流久彦〉
戦後台湾抗日運動史の構築——羅福星の革命事績を中心に 〈何義麟（北沢道子訳）〉
真宗大谷派台北別院の「戦後」——台湾における日本仏教へのイメージ形成に関する一考察 〈松金公正〉
戦後台湾における所謂塔式墓の系譜とその認識——無意識の中の「日本」のかたち 〈角南聡一郎〉
後書き 〈三尾裕子〉
索引・語彙集

体裁

- ・四六判・上製・カバー
- ・三二〇頁

税込み定価

- ・三一五〇円
- （本体三〇〇〇円）

注 文 書	
流通センター取扱品	
出版	地方
発売	風響社 TEL: 03-3828-9249
税込み	三一五〇円
部	

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一-一四九
電話〇三(三八二八)九二四九
http://www.fukyo.co.jp

五十嵐真子・三尾裕子編

戦後台湾における〈日本〉

植民地経験の連続・変貌・利用

ISBN4-89489-043-7 C1039 ¥3000E

〔お客様控え〕

ご氏名
ご住所
お電話

月 日